

## 学位論文の要約

題目 つながりの文化人類学：インド・チベット系社会における親族と非親族をめぐって

申請者 中屋敷 千尋

### 論文要約

本論文の目的は、北インド・チベット系社会スピティを対象に、人びとのつながりがどのように作りだされるのか、それはどのような性質かを明らかにすることである。具体的には、約20ヶ月のフィールド調査に基づき、これまで注目されてこなかった日常生活を支える互助的な親族カテゴリーであるニリンがいかなる関係か、どのようなつながりなのかを、場と時間の共有とそこでの微細なふるまいという視座から考察する。さらに、異なる階層の人びとや隣人、友人といった非親族との関係についても論じる。

本論文は、序章と終章に加え八章から構成される。この八章は、第一部「家族と親族」、第二部「ニリンをめぐる関わり」、第三部「非親族との関わり」の三部に分かれる。

序章では、チベット系社会における親族研究、人類学の親族研究における道義と戦術をめぐる議論、血液や体液など身体を構成する物体を意味するサブスタンスを重視する研究の三点について先行研究を批判的に検討する。それぞれ、1) 父系出自以外の日々の生活を支え合う親族への注目の欠如、2) 道義と戦術という親族研究における本質主義の限界、3) 個人主義的な交換を強調するサブスタンス概念の限界、という問題点を指摘する。これに対し、本論文は、1) 日々の生活を支え合う親族ニリンの実態の解明、2) 日々のやりとりの視点からの道義と戦術の再検討、そして3) 場と時間の共有とそこでの微細なふるまいへの着目という視座からチベット系社会の解明に取り組む。

第一部では、スピティにおける家族と親族の概要を示す。

第一章「調査地の説明」では、対象地であるインドの山岳地帯であるスピティ溪谷の地理的、社会的特徴を説明する。これまで幾度となく支配を受けてきたが、英国直轄領の時代を経て1959年にパンジャブ州に編入されるまで、実質的には領主制が存続していたことを示す。そして、ヒマーチャル・プラデーシュ州に合併後、パンチャーヤト制度や選挙制度が持ち込まれるとともに入域制限が解かれるなど、政治的、社会的、経済的、法的に劇的な変容を遂げていることについて説明する。

第二章「チベット系社会における家族と親族」では、父系出自の観念と父系出自集団、世

帯、キュムとカンパについて、それぞれ近年の変容もあわせて説明をする。

第三章「スピティにおける家族と親族」では、スピティにおける家族と親族について概観する。まず家屋とその成員を意味するカンパについては、相続の認識の変化や出稼ぎなどによる居住形態の変化との関連で理解する必要があることを示す。次に、「骨」として表現される父系出自の観念に関しては希薄化の傾向がみられることを指摘する。骨の名称は近年の変容以前に喪失されていることから、報告のある1900年代初めから1950年代のあいだに上記とは別の理由で喪失されたと考えられる。ただし、父系出自の観念がそのあり方を規定してきた婚姻の認識の変化に関しては、近年の制度的な変容も影響していることを示す。最後に、ニリンについてとりあげ、以下のように説明する。ニリンは、上記の諸観念とは異なり、日々の生活において親密な関係を築いている人のなかでも、血縁、姻戚関係を有するものがそこに含まれる。父方や母方関係なく親密な親族が含まれる。そのため、個人を起点として範囲が異なる。ニリンはその意義を考慮すると父系出自集団と並行して存在してきたと考えられる。これが重視されるようになった背景には選挙が関連していると考えられる。ニリンの関係は日々関わるなかで築かれるが、そこには道義も生まれうる。しかし、単なる相互扶助関係というわけではなく、ときに情動的にも支え合う存在であると指摘する。

第二部では、日々のニリンの関係がそれぞれの場面でどのように立ち現れるのかについて検討を行う。

第四章「経済活動」では、経済活動について概観し、商人同士の関係と農作業における関係を取りあげ、それらの実態を明らかにする。農作業においては、日々のニリン関係ではなく、収穫物や自らの体力の兼ね合いから特定の条件にあう相互扶助の相手を選ばれる。農地は女性のみ空間であることから、普段なされないようなしぐさ、表情や声色での会話が可能となる。これを通して親密な関係が築かれる。この関係は場合によっては義務関係にもなりうる。他方で、収穫量に影響する農業用水をめぐる人びとは緊張関係にある。

第五章「宗教実践」では、宗教実践について概観し、儀礼や儀式では、日々のニリンや隣人、友人だけでなく、過去の関係が想起されることで普段関わりがない人も、モノや労働力を提供していることを明らかにする。死者儀礼ではニリンや隣人が取り乱す遺族をなだめ、ともに寄り添い、支える。こうした人びとのあいだのつながりは、情動だけでなく厄災をも共有する関係である。このつながりは常に安定的、固定的なものではなく、場合によっては何らかの出来事を契機として不安定化されることを示す。

第六章「政治実践」では、政治活動について概観し、インドの政治体制の変化を背景に、選挙においてニリンが人びとを動員する資源として利用されていることを指摘する。選挙では、政党员は、普段ニリンと呼ばない人にまで戦術的にニリンという言葉を用いて働きか

け、票を獲得しようとする。働きかけられる投票者は場合によっては敵対する双方の政党员からニリンの関係を強調され、投票行動の決定困難に陥るといふ現象も生じている。また、政治の場面においてニリン間で道義や義務が果たされない場合、ニリンの関係が解消されることもある。なかには、利権争いの結果として団体と化したニリンも存在する。このように、親族と選挙が相互影響を与えている様子を描く。

第三部では、非親族との関わりについて検討する。

第七章「階層と親族」では、非親族のなかでも階層間関係を取りあげ、以下の点について指摘する。日々の階層間関係は、公の場では良好になっているが、私的な場では依然として下層の人びとに対して差別発言が聞かれる。政治の場面では、選挙制度や留保制度によって下層の人びとが政治決定に参加できるようになり、政治的な地位や発言力が大きくなっている。ただし、それに中間層の人びとの思惑が絡んでいることもあり、下層の人びとの発言力が向上していると一概にはいえない状況にある。さらに、宴会では中間層の人びとから下層の人びとへの差別発言や暴力行為が顕著になってきており、政治の場面での地位の揺らぎへの反動ともとれる現象が生じている。

第八章「隣人と友人関係」では、ニリンよりも隣人のほうが日常的に関わり、細やかな相互扶助関係を築いていることを示す。隣人は相互扶助だけでなく暇な時間をともに過ごすなど、密接な関係が生じうる。その過程で、互いを気にかけるような態度もみられる。そこから義務関係が生まれることもある。このほか、儀礼などの行事においても隣人は重要な位置づけにある。ときにはニリンの関係を越えるような対応をとることや、家族として言及されることもある。しかし、訪問される頻度や返礼の有無といった些細なことを契機として予期せぬ結果やジレンマが生じ、関係が不安定化することもあるなど、隣人関係は両義的であることを指摘する。

終章では、まとめと考察を行う。考察では、序章で提起した 3 つの問題点の検討を通して、1) チベット系社会の親族研究に対しては、系譜的なつながりだけでなく日々の関わりを通して築かれるニリンのような親族に注目する必要があること、その親族は日常生活と選挙に影響を与えるような存在であること、関わりに注目すると親族と非親族のあいだの区別は明確ではないこと、2) 道義と戦術の概念は構成的な視点から再構成でき、人類学の親族研究における断絶を埋め合わせることは可能であること、3) サブスタンス概念には還元できない人びとのつながりが存在し、それは場と時間の共有とそこでの人びとの微細なふるまいに注目することによって理解可能となること、以上の三点を明らかにする。